

高等学校 保健体育における学習意欲を高める指導・評価の研究

中学校・高等学校の系統性を踏まえた学習カードの活用

専門研修員 田中健次（川崎市立川崎高等学校）

主題設定の理由

学習指導要領にある「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現及び自らの健康を適切に管理し、改善していくための資質や能力を培う」という保健体育科の目標を達成するには、小学校・中学校及び高等学校における学習指導と評価の系統性がなければならないと考える。

小学校・中学校・高等学校では、それぞれの学習指導と評価が独立しがちな現状ではあるが、95%前後の児童生徒が高等学校の課程を修了する現代においては、発達段階の差などによる個人の違いはあるものの、学習指導と評価には各校種の系統性が不可欠である。

小学校での学習活動が中学校で生きる、中学校での学習活動が高等学校で生きる、といった「つながり」をより一層充実させることによって、学習指導要領に示されている「生涯体育・生涯スポーツ」へと発展していくものと考え。

各校種の学習指導と評価がそれぞれ独立したものであると、児童生徒の主体的な学びの姿をとらえることや各校種で培ってきた学習効果、特に学習意欲を損なう原因の一つになりかねない。また、評価の方法にも校種間のばらつきが出ることによって、児童生徒、保護者から評価に対する疑問を招き、さらに学習意欲を低下させる原因の一つになってしまうと考える。校種間や教科内で学習指導と評価の在り方について、共通理解を確認しておくことが大切である。

小学校・中学校・高等学校の学習指導要領において「小学校・中学校及び高等学校の教科の一貫性を踏まえ、当該校種の指導の重点や方向及びねらいを明確にした。(中略)又は、教科の関連性を踏まえ指導する」とあるように、各校種の学習指導と評価がつながりを持って系統的に機能することが学習意欲を高め、生涯にわたりスポーツに親しむ態度が育つと考える。

そこで本研究では、生徒が体育の授業で活用する「学習カード」を取り上げ、学習意欲の高まりを見取るカードの研究をすることとした。さらに、通常の授業で実施されるであろう領域と種目に対応する年間を通した学習カードを作成し、学習意欲の高まりを把握することにした。

以上が本研究の主題設定の理由である。

研究の内容

1 研究の方法

(1) 指導（学習カードの活用等）と評価についての現状を把握

中学校と高等学校からの聞き取り調査、資料収集

検証授業からの考察

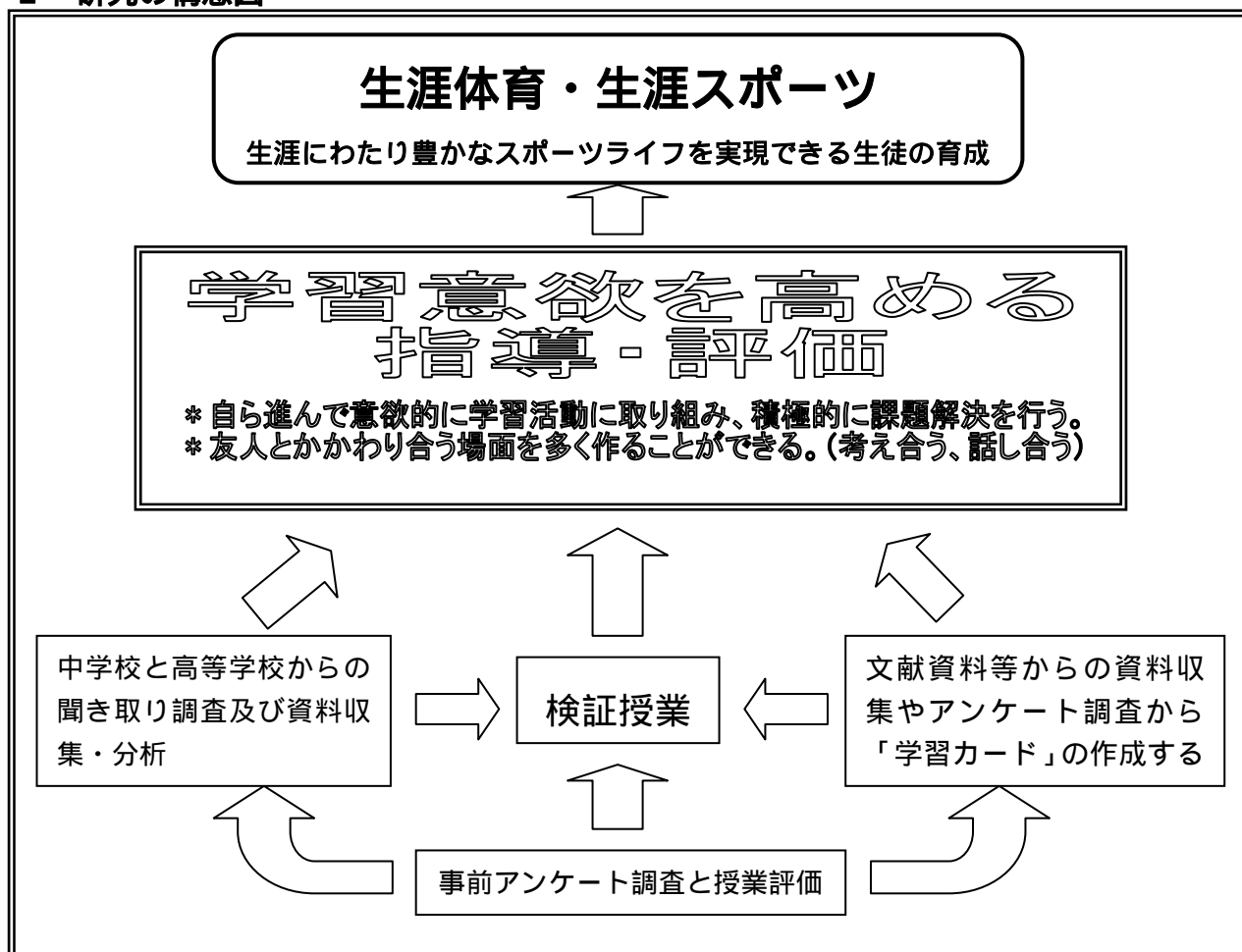
研究紀要・文献等による調査

(2) (1)の調査から生徒が学習に意欲的に取り組む指導と評価を工夫

指導と評価の工夫

学習カードと学習資料の工夫、改善、作成

2 研究の構想図



3 研究の仮説

研究主題及び副題、聞き取り調査、文献調査から以下のような仮説を設定した。

学習カードと資料を工夫・改善することにより、より深く技能を理解して習得ができ、上達する。このことにより学習意欲が高まり、積極的に授業に取り組む姿勢がみられる。

4 具体的な取組

(1) 中学校と高等学校の学習カードから

学習の資料

資料の内容では、中学校は基礎・基本を中心とし、多くの内容が技能的に中程度の生徒を対象としたものである。分かりやすく、図や絵を多く使用し、詳細に説明されている内容が特徴である。高等学校では専門的な語句の説明が多く、文章による内容説明になっている。さらに作戦等が自ら立てられるように実践（作戦ボード等）に使えるものとなっている。

中学校・高等学校とも領域内選択制授業及び種目内選択制授業を実施しているが、中学校の選択制では、なるべく多くの種目を選択させて実施させるようにしていることから、内容的に広く浅くというような資料になっている。高等学校では選択の幅を多様化させている。専門的な高度な技能を身に付けるといった観点から、1つの種目に多くの時間をかけて実施している。内容は詳細で専門的な資料になっている。

学習の記録表・学習の見通しとしての学習カードから

記録表としての内容では、中学校は具体的な技能を図解《表1》させたり、作戦を図解させたりというように、より具体的に自分たちが今、行っている種目と単元を記録させることにより、理解させ、習得させるように工夫されている。高等学校では、記号や空欄にチェックをするなどの、いわゆるチェック（学習の見通しをつけ、自分を振り返るもの）機能《表2》を多用したものとなっている。（前提として中学校では一通りの基本的技能を習得しているものとして考えた）また、高等学校では選択の幅を広げているが、各単元を集中的に実施し、その内容を「深める」という意味でも、授業中の記録する（書く）ことを最小限にしようとしている。

《表1》A 中学校のバスケットボール個人学習記録表（一部抜粋）

3時間 間目	1. 今回の課題（活動目標）
	2. 課題解決のために、どんなことを工夫して練習しましたか 図解

* 上記のものは1時間の授業中に記入する5割程度の内容である。

《表2》B 高等学校のバスケットボール個人学習記録表（一部抜粋）

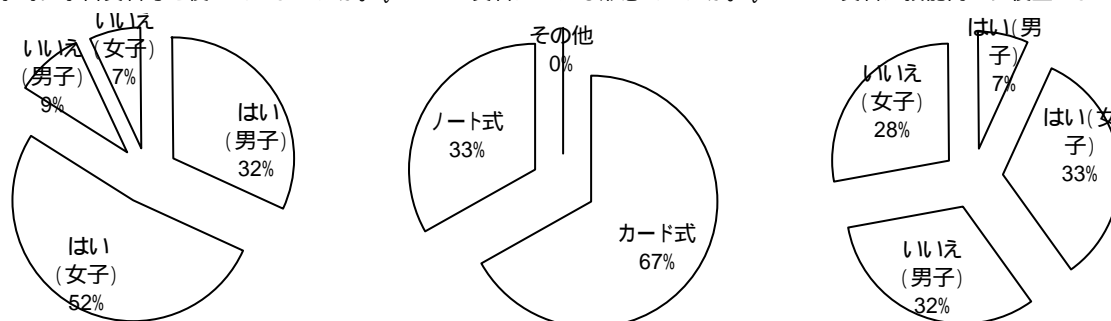
月日	時間	自分が取り組む課題	課題の成果・反省	準備	活動	協力	積極	安全	片付	先生から
	3			A	A	A	A	A	A	
				A2	A2	A2	A2	A2	A2	
					B	B	B	B	B	
					B2	B2	B2	B2	B2	
					C	C	C	C	C	

* 上記のものは検証授業で使用した1時間の授業中に記入する9割の内容である。

（2）高等学校の検証授業からの考察

事前アンケート調査結果より（一部抜粋）

Q1 .中学時に学習資料等を使っていましたか。Q2 .その資料はどんな形態でしたか。Q3 .その資料は技能向上に役立ちましたか。



事前アンケート調査Q1とQ2の結果から、8割以上の中学校で学習資料・カード・ノートを使用していた。また、その形態は7割近くの中学校でカード式であった。以上のことから、検証授業においてもカード式の「学習カード」を使用した。

学習カードの工夫

前述の事前アンケート調査Q3の結果から、学習カードを作成する際に留意したことは、中学校の学習カードをもとに、技能の向上を特に強く出して作成したことである。具体的には、生徒の基本的技能は、ある程度習得しているものとして考え、自分のもっている力（技能）を知り、自分の今の力（技能）をより向上させるための、学習の方法が明確になるように作成した。決して教師からの押し付けではなく、あくまでも生徒自らが主体的に課題（技能）を見付け、進んで課題解決をすることを前提としていることは言うまでもない。

次に工夫した点は内容を分かりやすくするという点である。授業では50分間の中の何分をカード記入等の時間とするかという点も考慮しなければならない。先にも述べたが、文章表記をなるべく簡易にし、×やチェック・数字で表記する部分を多くした点である。《表2、表3》本来は、50分の授業時間内で学習カード等への記入は終わる。

次に工夫した点は「カード式」ということを強調して、画用紙を両面印刷にして使い、耐久性のあるカードとしたことである。以上の点が、学習カードの工夫した点である。

《表3》学習記録表「勝敗表」一部抜粋

	はじめ			自己評価	なか			自己評価	まとめ			自己評価
時間	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
月日	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
相手												
スコア												
勝敗												

学習カードの効果

生徒からは、「自分の今の学習状況が把握できる」「次に何をしなくてはならないかが分かる」などの自分の学習状況を把握し、学習の見通しをもち、また自己を振り返ることにより、次の学習につながるような意見を読み取ることができた。また、「レベル的に高い課題を設定してしまったために解決までには至らなかった」などの意見もあった。いずれにしても、生徒が今の自分自身の学習状況を意識し、把握しているという点では成果があったと考えられる。

（3）指導と評価の工夫

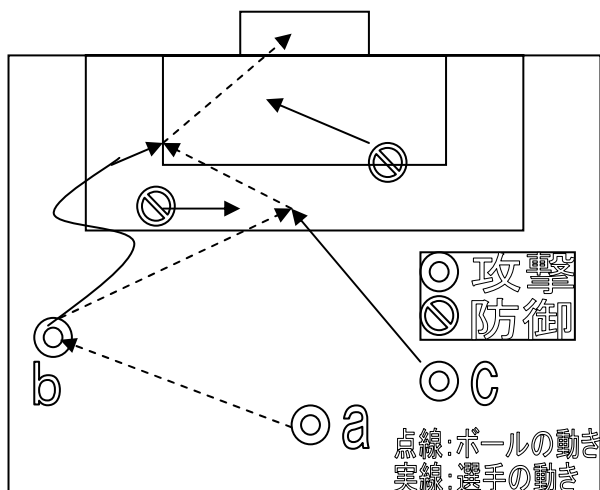
中学生と高校生の部活動（体育・運動部）加入率を比較すると、中学生では70%前後の加入率に比べ、高校生では加入率が40%以下となっている現状を考えれば、明らかに全体としての運動をする機会が少なくなっている。このような現状から、高等学校の体育実技の授業では、「体を動かす機会（時間・場所）を多くする」ことも大事な指導の要素として考慮しなければならない。

指導の工夫

《表4》時間の確保

時間	内容
0～5	5 本時のねらい確認
5～10	5 種目の特性を生かした準備運動
10～20	10 課題練習、練習ゲーム
20～45	25 リーグ戦、トーナメント戦など
45～50	5 本時の反省、まとめ

《表4》は一例ではあるが、50分間の授業の中で、実に40分間は「体を動かす」時間として確保している。種目によっては、話し合い活動などもあり、一概には40分間の実技時間が確保できない種目もある。



《図1》学習資料の作成 例：サッカー課題練習例

《図1》はサッカーの例である。

左図は「フェイントをかけてスペースを作り、パスを受けてノートラップでシュートする」という課題練習例である。

高等学校では左図のような技能レベルの動きを課題練習時に実施するよう指導している。チームによっては左図の課題練習の動きを発展させた練習も実施していた。

指導の工夫では特に「活動時間の確保」と「高度な技能の学習資料」という点に重点を置いた。時間の確保では前述したように基本的な技能は中学時に習得しているものと考え、また、話し合い活動等の時間を焦点化できるものとする。同じように学習資料にしても基本的技能の資料を省くことにより、導入の段階から高い位置へ課題（目標）を設定することができる。と考える。

ただ一つ気を付けなければいけない点は、「中学校の領域内・種目内選択制」ということである。例えばサッカーを例に考えると、中学時はサッカーを全く選択していない生徒が高等学校へ来て初めてサッカーを選択した場合も考えられる。その場合には、前述したような考え方の学習資料では通用しなくなるという点である。本校では、事前に生徒に調査をかけてアセスメントをとるので、このような例は今までにはないが、今後の一つの課題であるとする。

評価の工夫

関心や意欲、活動状況等を合わせて評価する場合は、必ず学習カードを評価の重要な資料としている。生徒には初めに評価に関する内容を導入段階で詳しく説明する。ただ体を動かすだけではなく、課題に向かって自分自身をとらえて目標をもち、その目標を達成するためには、何をどのようにしたら良いのか、学習に見通しをもち、自分の考えを明らかにすることが、技能向上のポイントであることを理解させ、学習カードを目標の達成の手段として活用することを認識させる。

教師は、学習カードから生徒が取り組んでいる課題や技能などを読み取り、その課題や技能を主体的に解決しているか、その解決方法を用いて、技能として身に付けているかを評価することが重要である。毎時間の評価や反省に書かれている内容が、ただ「頑張った」「もう少しだ」といった抽象的な反省では、何を頑張ったのか、何がもう少しなのかが分からないため、簡潔に分かりやすく記入することも指導していかなければならない。

学習カードでは、観点別評価の4項目の中の「関心・意欲・態度」「思考・判断」「知識・理解」を評価することができる。ただし、「技能」については活動の中で評価する。保健体育での観点別評価の配分率は、基本的には4つの観点（「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」「知識・理解」）を同じ比率にした配分率であるが、それぞれ各校の実情に応じて配分したり、単元によって軽重をつけて評価することが望ましい。

（4）学習カードの工夫と改善

短時間で記入できるようにチェック欄を多用し、文章での記述を少なくする。

どの種目においても画用紙を使い、屋外でも耐えられるものとする。

前時の活動の様子と次時の課題を並列して記入できるようにする。
教師はカード点検の際に必ずコメントを記入する。

研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

学習資料と学習カードの活用に関しては、当初思っていた以上に理解を示し、取り組んでいた。社会に出ることとなる高校生の自覚なのか、自主的な活動をしていたように感じた。事後の生徒への聞き取り調査にも「今後も学習カードを使ってほしい」という意見も多く見られた。中には「ただ動くだけの授業だったが、カードを中心に話し合いや意見の交換が随時できて楽しかった」という人とのかかわりから、学習意欲の高まりを感じることで意見を読み取ることができた。技能の向上という視点からは、生徒の活動状況の把握が容易になった点と一目で技能の上達状況が分かる、中学時に習得した基本的技能のさらに上位の技能を考え活動できる点が挙げられた。また、先にも述べたが学習カードをもとにした話し合い活動を通じて友人とのかかわり合う機会（相手の良さを見付けるなど）が増えたという点、学習カードを通して、態度面での高まりを見取ることができ、次の学習に向かう姿を確認できた。

2 今後の課題

本研究で実施した「学習カードの研究」は、研究とはいえ、ほんの一部にしか過ぎず、様々な面から高等学校保健体育についての研究を実施していかななくてはならないと痛感した。

今回の研究は、学習意欲の高まりにより、運動技能の向上を目指した学習カードという視点で進めてきたが、本来、多様な生徒の特性等に対応できるような視点で考える必要がある。

高等学校保健体育の学習カード一つをとっても、基本となるべき形式のカード自体が、完成されたものがない現状では、まだまだ手探りの研究が続くことと思われる。今後は、高等学校間の連携を密にし、中学校との交流を多くし、地区研究会等への積極的な参加を含め、中学校と高等学校の6年間を見通した「中等教育としての保健体育の在り方」を探るべきであると考えます。

最後に、研究を進めるにあたり適切なご助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言を下さいました学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

「小学校学習指導要領解説 体育編」 文部省	1999 年
「中学校学習指導要領解説 保健体育編」 文部省	1999 年
「高等学校学習指導要領解説 保健体育編」 文部省	1999 年
「カラーワイドスポーツ」 大修館書店	2003 年
「月刊体育科教育」 大修館書店	2003 年
「現代保健体育」 大修館書店	2003 年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター研修指導主事	山田 義弥
川崎市総合教育センター研修指導主事	前島 和樹